

## 第12回 くまもと未来会議 議事録

日 時:平成25年8月29日(木)午後3時～午後5時

場 所:ホテル熊本テルサ(3階 たい樹)

テーマ:未来に責任を果たすには

出席者:大竹 美喜 委員(アフラック(アメリカンファミリー生命保険会社)創業者・最高顧問)

北岡 伸一 委員(国際大学学長、政策研究大学院大学教授、東京大学名誉教授)

蒲島 郁夫 議長(熊本県知事)

### 【事務局】

皆さま大変お待たせしました。定刻になりましたので、ただ今より「第12回くまもと未来会議」を開催します。

私は、会議の事務局を担当しています、熊本県企画振興部企画課の小原と申します。どうぞよろしくお願い致します。

はじめに、本日御出席の委員の皆さまをご紹介させていただきます。

まずお一人目は、アフラック(アメリカンファミリー生命保険会社)創業者・最高顧問 大竹 美喜委員です。

次に、国際大学 学長 北岡 伸一委員です。

お二人の略歴につきましては、皆さまに入口でお渡しした資料の中にご覧いただけますと思います。

それでは、これより議長が会議の進行を行います。蒲島知事よろしくお願い致します。

### 【蒲島議長】

本日は大変お忙しい中、またお暑い中、沢山の方々に、第12回くまもと未来会議にご出席いただき、誠にありがとうございます。

くまもと未来会議を平成20年に設置して以来、熊本県の将来の飛躍につながるような観点から、全国的な有識者の方々に長期的、かつ大所高所からさまざまな意見をいただけてきました。本年度は、対象を熊本だけに絞らず、日本を見据えたもっと大きな観点から、100年後に残るような大所高所からの議論をしていただく中で、県勢発展のヒントをいただくような会議にしたいと考えています。

今日は、多くの県議会議員の方々もお見えですので、行政と議会が一緒になって、県勢発展のヒントをいただければと思っています。

今日は、「未来に責任を果たすには」という大きなテーマのもと、それぞれの分野で日本を代表する委員のお二人に議論をお願いしたいと思います。委員の皆さまは、是非幅広い視点から自由なご意見をよろしくお願い致します。

それでは、まず意見交換に入りたいと思います。大竹委員からお願いします。

#### 【大竹委員】

ご紹介いただいた大竹です。今、蒲島知事からお話ございました件について、私の私見をお伝えさせていただければと思います。

今、世界をいろいろ見てみますと、変化の大きさと、そのスピード、あるいはその深さといったものが、急激に進んでいるように思えてなりません。これを五つの軸に分類してご説明したいと思います。

一番大きな変化というのは、物理的な変化があります。

二つ目には、社会文化的な変化ではないかと思えますし、三つ目には、日本人が一番不得意な分野かもしれませんが、心理学的な変化。四つ目には政治、規制の変化。

最後は、私たちが最も関係の深い、ビジネス、経済の変化ではないかと思うわけです。

なぜ、こういう話から入らせていただいたかと言いますと、アメリカのデューク大学のデビッドソンという教授が、今から17年後の2030年に、現在あるビジネスの60%が消えてしまうのではないかという発表をされましたので、私は非常に大きなショックを受けました。今は、2013年ですから、今年生まれた方々が大学を卒業される頃は、今のビジネスの6割が入れ替わっているということになりますと、今のうちから、かなり真剣に向き合って問題解決をするべきではないかという気がします。

これは、未来学者のある予言でございりますが、未来学者というのは、歴史学者でもあるかと思えます。私は、20歳でアメリカに渡り今74歳ですので、もう54年経っています。54年間どんな変化があったか過去の歴史を振り返ってみますと、直近では、アメリカを代表するフォーチュン500という500社のうちの二分の一くらいが、統廃合され新しい形に変わってきています。

日本での例で言えば、延岡に旭化成という会社があります。旭化成も、歴史を見てみますと、日本窒素から始まっています。そして繊維会社になり、業種転換、新機軸をどんどん打ち出され、今も隆盛を誇っていらっしゃいます。

一方、カネボウという会社はご存じのような形になっております。この差がどこにあるのか。

私は、5月31日に、韓国の済州島でアジア版ダボス会議に出席しました。3,300人お集まりになったところで、私は日本の国を紹介させていただいたのです。

1000年の歴史のある企業が何社あるかというのと、19社あるわけです。日本の歴史がどこからというのは、いろいろ異論はあるかと思えますが、私は、(701年の大宝律令において「日本」という国号が定められたとすると)1312年の歴史があると申し上げました。昨日も、日経新聞の「グローバル教育フォーラム」でその話をさせていただきました。1000年企業、500年企業、300年企業、100年企業を全世界で比較してみますと、世界の二分の一の長寿企業が日本国にあるということが分かったのです。100年企業になりますと、5万社あるようです。議論したときにサムスンの方が一緒だったのですが、韓国には100年以上の会社が何社あるか質問したら、1社も無いと言います。正しいかどうかは分かりませんが、その方はそう答えられました。この長寿企業も、

ヒューマンウェアと言いますか、やはり日本的な伝統と革新のもとで、世界に誇れる日本の伝統と  
いったものを、是非大切に受け継ぎ、引き継ぐべき責任があると思います。

昨日、東京のグローバル教育フォーラムでは、ハーバード大学の竹内教授と私の二人が、45  
分間ずつ基調講演をさせていただいたところでも、そのお話をさせていただきました。なぜその話  
を申し上げるかという、今グローバル化が大きく進展しており、国民は非常にうろたえているわ  
けです。それは受け入れなくてはならないのですが、日本的なもの、日本語というものを大切に  
しながら、しかも欧米人が持っていないアジアの哲学、思想を土台にして、また欧米のいいところを  
取り入れていく。ベストミックスして、将来を展望すべきではないかと思えます。

私は、つい先日まで、全国の高校生を淡路島の洲本に集めて、合宿させたのです。そこで私は、  
八つのことを高校生に伝えました。

- 一つ目は、真の自分を生きる力。
- 二つ目は、心をつき動かすメッセージ発信力。
- 三つ目は、自らの意思で動く強いチームをつくること。
- 四つ目は、新しい価値を生み出す対話力。
- 五つ目は、創造的な問題解決力。
- 六つ目は、自ら学び進化する強い組織をつくる力。
- 七つ目は、学習する力。
- 八つ目は、育成する力。

また、知事と教育再生実行会議で一緒にさせていただいておりますが、私は価値観というもの  
を重視していきたいと強く思っております。そこで、未来をつくる四つの価値観というのを、高校生  
に申し上げました。

一つ目は、人間の想像力と無限の可能性を信ずるということです。シカゴ大学では、ノーベル賞  
をもらった方が87名いらっしゃいます。ノーベル賞王国と言われてはいますが、なぜシカゴ大学は、  
ノーベル賞受賞者が沢山出ているのかというと、古典をはじめとし一般教養を学んでいるというこ  
とが分かったわけです。米国には、ハーバード大学をはじめ有名な大学が沢山あります。しかし、  
シカゴ大学では、学力よりも心力を強く教えていらっしゃるということが分かりました。一番目に人  
間の創造力と無限の可能性を信ずるということを学ばせると、それがノーベル賞にも通じるこ  
とであると、私は自信を持って若者に伝えたいと思えます。

二つ目は、他者への共感を大事にするということです。

三つ目は、安倍総理もよく使っている言葉ですが、多様性を尊重するということです。今  
日の日経新聞にも緒方貞子さんが、そのようなことを書いておられました。

四つ目は、倫理観を大事にするということです。

こういったことを四つの価値観と伝えているわけです。(クマヒラセキュリティ財団 代表理事 熊  
平 美香さん資料 未来を創る「8つの力」、「4つの価値観」より参照)

また、北岡先生からいろいろお話をお伺いして、議論させていただければと思います。

資料として、若手経営者を集めて大竹塾というのをやっております、その人々を連れて韓国

の国務総理にお会いした時の記事を配布させていただきました。また、アショカ財団のことも、皆さんにペーパーで配布させていただいておりますので、後ほどご興味のお有りの方は、お目通しいただければ幸いです。以上です。

#### 【蒲島議長】

ありがとうございます。今、大竹委員から新聞記事を紹介していただきましたが、この金興植（キム・ウンシュク）氏のことを紹介していただいたのは、大竹委員です。その人の有名な言葉が「皿を割れ」という言葉で、これは今、「みんなで皿を割ろう」という熊本県庁の合言葉でもあります。今日は、県庁の職員の方もいらっしゃると思いますので、原点がここにあるということを紹介したいと思います。

それでは、北岡委員をお願いします。

#### 【北岡委員】

非常に大きなテーマなので、私の今直面している問題で、未来に責任を果たすということに関係するものをいくつかピックアップしてお話したいと思います。

最初に自己紹介がてらお話しすると、蒲島さんと最初にお目にかかったのは、31、2年前私がプリンストンに留学していたときに、蒲島さんが訪ねてこられたときです。その後、筑波大学に私が非常勤講師で行った時にもお目にかかり、たまに学会でのお付き合いがあったり、東大にちょうど同じ頃勤めたりして、とても仲良くしておりました。そして、私が、途中国連大使になったり、蒲島さんが選挙に出られて辞められたりしました。

また、蒲島さんは県立大学をいろいろ改革してこられ、五百旗頭さんを理事長にもってこられたと聞きました。私は奈良県出身ですが、地元の知事が「うちもやりたい」と言い出しまして、今度私を奈良県立大学に引っ張り込もうとしております。それもあって、今日はこちらの県立大学の様子を見学に行かせていただきましたが、とても参考になりました。

外からどう見えるかということのご紹介ですが、熊本は、県内の方は県立大学に入って、県内で就職されるという、県の税金の使い方としては理想的なパターンです。一方、奈良県は、県外の方が来て、県外に就職するのです。県立奈良大は県北の端にあり、大阪に近いところですから、これは非常に難しいと考えています。

また、私は、政策研究大学院大学の専任ですが、もう一つ新潟の浦佐という所にある国際大学で非常勤の学長をしています。ここは全部大学院で、授業は全部英語、学生は9割外国人というところなのです。実際、一学年200人のうち9割近くいる外国人は、基本的に途上国のエリートです。東南アジアが多いのですが、中央アジアや中東、アメリカもいます。こういうところから日本にやってきて勉強しておられる。我々からすると、途上国の発展のベストモデルは、やはり日本だと思います。日本ほど見事に発展した国はありません。日本の発展の在り方を、日本語で勉強するのは大変なので、英語でしっかり勉強して、帰ってエリートになってもらい、それをよく生かしてその国を発展してほしいし、同時に親日国になってほしいと思います。これは、投資にして換算すれ

ば一人500万円です。途上国の発展に貢献し、かつ親日派をつくって、こんなに安い投資はないと思います。私は、国連大使をしていたので、PKO や ODA もしましたが、人間形成、人材育成における貢献というのは、日本ができるベストなものだと思います。実は、政策研究大学院大学も同じことをしているので、東大を定年になり、その分野をやろうと思って今そちらに来ている次第です。

他のPKOであれば、やっている国はもっと沢山あります。ODAは、日本は少し下り坂で、今はやはり中国の勢いがすごいです。

日本は、こういう人材育成で最も協力すべきだというのが、最初に上げたいポイントです。そして、県立大学やいろいろなところどう結び付けるか。しかし、外国人の学生が9割というのは行き過ぎで、日本人の友達ができずに帰ってしまうケースがあるので、もっと日本の企業からいろいろな方を入れて、せめて6:4、7:3ぐらいにしたいと思っています。

大学院だけの大学だと学生数が少ないので、ビジネスモデルとしては非常に効率が悪いのです。ですから、いろいろコネクションを利用して、企業や自治体から社員や職員を派遣してもらっています。地方自治体や日本企業もアジア展開を随分よくやっておられますが、アジアの学生が多いので、そういうところに学生を送りませんか。1年で修士がとれますし、2年コースもあります。是非、熊本県やアフラックでも考えていただけたらありがたいと思います。

今の話は、本論に関係が無い宣伝をしたわけではありません。日本の未来への責任で、今日日本の一番深刻な病気、苦しい課題が二つあります。

一つは累積債務です。この巨大な政府の公的債務をどうやって返済するかというのは大変な仕事です。右に行けばハイパーインフレ、左に行けば景気の失速ということで、本当に細い道をどうやってたどっていくかということに来ています。これをするには、やはり負担を上げていく必要がありますが、そこに発生するのは世代間ギャップです。総体的に恵まれた待遇を受けている高齢者からいかに資金を若い者にシフトさせるかというのは、大変な課題です。しかもそこにある課題は、ルールを変えなくてはならないということです。日本人は、ルールを変えるというのが非常に苦手です。今、一応快適な生活ができています。すると、もう少し続くのではないかと、まだ大丈夫ではないかと言っているうちに、いつか大きな破たんが来るかもしれません。その破たんが来る前にルールを変えていく能力というのが、問われていると思います。

昨今、憲法改正論が話題になり、私はどちらかというと、ゆるやかな改正論者で、できれば改正しなくてはいけないと思っています。改正反対という方の根っこに、今あるルールを別に変えなくてもよいのではないかという、少し視野狭窄の反対論が大きく存在することを、私は日本の未来のために非常に憂えています。

さて、もう一つの、もう少し長期的な日本の大きな課題は、少子化だと思っています。このままいけば、日本人は、どんどん減ります。私は日本が大好きですし、日本というのは立派な文明だと思っており、誇りを持っています。その存在がどんどん減るということですから、これはとても良くないことです。そこで、何とかまず子どもの数を増やさなくてはなりません。昔の「産めよ増やせよ」と言われたら困るのですが、今は、日本の若い人の何か根源的な迫力、生命力が落ちているのではないかと思います。何とかしないと、日本人がそもそも衰退していきます。これは由々しいことだと

思いますので、何とかしたいと思っているわけです。

それは、やろうと思えばできるのです。西洋では、かつて1. 2や1. 3であったのが、1. 8、や1. 9に戻っている国がいくつかあります。今の1. 2、1. 3程度と、1. 8、1. 9は随分違います。とにかくそこまで落ちたものを、増やしていくことが必要だと思っています。

こう考えていきますと、次に生じる問題は、では日本人とは何だろうかということなのです。どこからどこまで、日本人か。

例えば、ドナルド・キーン先生は、日本人よりずっと日本人です。サッカーのラモスなど、そのような人は沢山います。日本のことをよく知り、日本文化を愛し、日本語を話す、そうすれば広い意味で日本人だと考えていく必要があります。日本人とは何だろうかと考え、そこから歴史を遡るわけです。そうすると、未来のためには、過去をよく知らなくてはならないと思います。

私は、奈良出身ですが、奈良というのは、非常に国際的な町でした。中国、朝鮮は言うに及ばず、もっと西域のいろいろな人が住んでいて、いろいろな言葉が飛び交っていたところでした。次の平安時代は、スタティックな鎖国的な時代で、日本はそれを繰り返してきたのです。明治幕末まで鎖国の時代があり、また西洋化があり、そして戦後、日本は高度成長の中で、やや鎖国的になってきたのではないかと思います。

蒲島さんや大竹さんのように、外に飛び出して行って活躍される方は非常に珍しいです。国内にいれば、快適です。情報はネットでもとれるし、本もアマゾンですぐ買えるし、何も苦勞して外に行かなくてもということです。実に優秀な若手の学者でも、結構、外に行かない人がいます。違う文化で暮らすということは、大事なことなのです。

そういうところにも、私は何か根源的な生命力の衰退を感じる次第です。過去を振り返ると、日本は決してそうではなかったと思います。日本人性とは何かということです。そうすると、そのような日本人性を持った日本人は他の国とどう付き合うかという問題が次に来ているわけです。その日本人性、日本人的な在り方というのは、世界で結構通用すると思っています。

大竹さんの資料にあることを先に言わせていただければ、私もアフリカの貧困削減支援の小さな NGO をしており、アフリカに時々行きます。妻と二人で運営していて、妻は今もアフリカに行っています。

日本は、5年前に、福田さんのときから TICAD というアフリカ開発会議を開催しており、この間、安倍さんと開催しました。この前までは、援助をどう行うかいろいろ苦勞し、福田さんにも、五百旗頭さんが座長をしている会合で、私と緒方貞子さんと、いろいろとアフリカの説明をしましたが、なかなか福田さんもシニカルで、あまり一生懸命になってくれないのです。しかし、決めたら一生懸命やったださる人です。

5年後の今回の大きな違いは、今回はアフリカへ投資するというマインドで来てくださった企業が多かったのです。アフリカのコンゴは紛争をしていますが、結構紛争地域も減ってきていて、安定して生活している人も増えています。全体として南サハラで5%を超える成長を平均して続けていけます。ボトム・ビリオンあるいは、ベース・オブ・ビリオンと言いまして、下の10億人が低いので伸び代が高く、大きな変化を生みます。

例えばケニアに行きますと、古い伝統を持ち肉しか食べないマサイ族という部族がいます。そういう部族の人が、自転車に乗って携帯で話しているのです。最初は、驚きました。彼らも、小さな電源と携帯があれば、ニューヨークとも話が通じるのです。そういう時代になってきているということで、必ず伸びると思います。

これまで縁が深かった西洋諸国や、中国も強大な力が出て行っていますが、やはり東南アジア援助に成功したのは日本です。なぜ成功したかという点、一番良かったのは、上から目線ではなく、何がお国のためになるか、Win-Win の関係をどうやってつくるか、政治の難しい話は少し後において一緒に豊かになりましょうと対等の話し合いをしたことです。お互いの国を豊かにし、我々もそれで商売をさせてもらって利益を得て、それがみんなに広まり、中産階級が増え、その上に民主化が進められるわけです。

今、東南アジアで一番民主的な国は、実はインドネシアです。こんなことは、30年前には絶対考えられませんでした。そういうことが起こっているのです。私は、上から目線ではなく、アフリカの人と友達でやっていこうという日本モデルは、結構通用すると思うのです。日本が世界の経済の10何%、20%を占めるような時代はもう来ないと思います。しかし、日本式のやり方で世界に浸透し、尊敬を勝ち取ることは十分可能だと思っています。そのためには、もう一度、日本人の在り方は何か、我々の過去は何だったのかということ、良いところも悪いところも合わせて振り返り、自分のアイデンティティを発見するということは、実は未来に責任を果たすために、最も重要なスターティングポイントではないかと考えています。

#### 【蒲島議長】

ありがとうございました。今、北岡委員から、留学生一人当たり500万ほどかかるが、それは、未来に対しては安い投資だというお話がありました。私もそう思います。

今、熊本県のアプローチとしては、水俣に水俣病を研究している国立水俣病総合研究センターという国立の研究施設がありますが、学位授与権はありません。しかし、大学院は学位授与権があるので、県立大学と慶応大学と、国水研が共同で、公害関係、特に水俣病の被害を無くすというような大学院大学をつくらうと動いています。それは、全世界の公害を無くすというプラスの面もあるし、日本、特に水俣に留学してくる人たちへ、一人500万円ほど奨学金を出さなくてはならないかもしれませんが、5人入れると2,500万円、それができたら非常に効率的だと思っていた次第です。

では、大竹委員をお願いします。

#### 【大竹委員】

北岡先生から、貴重なお話をいただいてうれしくなりました。結局 basic to back、基本に戻るということをおっしゃっていただいたと思うのですが、基本に振り返る。未来学者というのは、歴史学者ともよく言われますが、やはり歴史というのは非常に貴重なものだということを、今、先生からお聞きして、感じさせていただいたわけです。

私個人の人生を振り返ってみても、会社の過去を振り返り現在を見ていても、国家もそうなのですが、世界全体もきっとそうだと思います。ですから、歴史というものを、ものすごく学ぶ、学び直す。日本がOECDに加入したのが1964年です。それまでは、この日本国は発展途上国であったわけです。戦後、日本は非常に急成長した国ですから、半世紀でそのことを忘れてしまっているのです。戦後68年経ちましたが、私が国会議員の秘書をやっていた頃、池田勇人さんが所得倍増論というのを謳われて、ほとんど皆さん賛成しなかったのです。ごくごく少数の人しか理解しなかったのが、4年後に見事に実現されてから一気にかけ上がったという歴史です。

1960年代、あるいは80年代をそういうふうに見てみますと、なぜこうなっているのかと言えば、北岡先生がおっしゃっていただいたような答えではないかと思っています。

未来の展望というのはかなりあるわけで、私たちが自信を取り戻すことを私は切望してやまないのです。今年の春、オマーン政府のお役所の局長クラスが、日本国で一週間勉強するというので、海外産業人材育成協会(HIDA)から依頼されて半日講師を務めさせていただきました。サッカーでオマーンと日本が戦ったというのはよく分かっていますが、オマーンという国がどこにあるのかも正直言ってよく存じませんでしたので、にわか勉強させていただきました。驚いたことに、来られた方々が実に立派なのです。そして日本について、本当によく勉強してきておられました。なぜ日本から学びたいかという、先ほど北岡先生がおっしゃったことを理由にあげられました。安倍総理が今日も中東に行っていたと思いますが、総理大臣が、諸外国、特に中東を回る中で、日本から学びたい、日本に留学生を送りたい、教えてくださいという声を聞き、日本の実力を実感されているようです。

資源国もいずれ資源がなくなります。最大の資源は「人」であり、だから「教育」だということです。もう既に、早々と考えて行動されている中東諸国の皆さん方に対して、私たちの果たせる役割というのは、随分あると思います。正確には存じませんが、職種を再分割すれば3万種類になるのだそうです。とても3万種類の職業をあげるわけにはいきませんが、新しいビジネスもどんどん生まれている半面、急速に成長したコンピュータのDellという会社は米国企業ではなくなりました。そのため今、何を信じてどういうふう生きていけばよいのか、若者も戸惑っていると思うのです。ですから国家としてしっかりした軸を持ち、日本の歴史と伝統というものを尊重しながらも、新しいものをどんどんつくっていくことです。

私は、昨日、今までの優等生は劣等生になるということ、グローバル教育フォーラムで話しました。極端な話をしないと皆さんお分かりいただけないから、敢えてそういう表現を用いたわけですが、後藤新平のような方が、今登場してほしいということを申し上げたわけです。つまり、異能・異才な方です。意識改革が非常に難しいことは、会社の中でもよく分かります。私は、40年、50年と会社を経営して参りましたが、社内に変革を起こすことは極めて難しい。今のままの方が、一番快適なのです。ですから変化は好まないのです。

変化を常に続けていたのは、世界銀行だと思います。たまたま私の友人が副総裁になり、人事担当をなさったのですが、常に、安定したと思ったら破壊、創造を、繰り返してこられたということをお聞きしたことがあります。企業も国家もきっと同じではないかと思っています。そうすれば、この国は

今のようなことにはなっていないのです。

ですから、私は1994年に「これでいいのかニッポン」という本をNHK出版から上梓させていただきました。村山総理大臣も読んでくださり、それまで一面識もなかったのですが経済審議会の委員に選んでくださいました。あの時の危機感を持って「これでいいのかニッポン」というタイトルの本を上梓させていただいたのですが、あまり読まれていませんが一部の人にはご理解いただいたと思います。

今、先生におっしゃっていただいたような累積債務も、そんなに大した金額ではなくて、400兆円くらいだったかと思います。それが、今では1,000兆円になって、どうしようもないような状況を迎えています。手を打っていないのです。結局、変化を好まなかったのです。しかし、変化というのは時代とともに絶えず必要なもので、創造と破壊を繰り返さなければなりません。我々の人生もそうだと思います。

#### 【蒲島議長】

それでは、北岡委員お願いします。

#### 【北岡委員】

私と蒲島さんが、ちょうど平成12年頃東大にいましたが、なかなか最初は快適でした。落ち着いた古びた研究室で静かに勉強できる気がしたのです。

しばらくして少し飽きてきたのではないかと思うのですが、あまりそんな話はしたことがありません。全ての制度が、非常によくできているのです。ですから、変えるのがなかなか難しいという感じがしました。

小さな例をあげますと、例えば私が国連大使をしていて、小宮山さんが総長だったときに、コフィ・アナンさんが日本に来るので、東大に行ってもらって、名誉学位を差し上げようと思いました。あちらも喜んでくれるし東大の宣伝にもなると言うと、反対する人がいるのです。なぜなら、東大は政治家にこういう名誉学位をあまり出さない大学です。政治家というのは、誰かと対立していますから、どこかを褒めれば、どこかと角がたちます。だから何もしないという伝統があるのです。オフィシャルなゲストで来て話したのは、50年代にネルーさんが来たときだけです。ネルーは中立主義だったからまだ良かったのですが、コフィ・アナンが来たら反対だと言うのです。前例が無い。いつもこれです。これが困るのです。何とか押し切りましたが、ノーベル賞ならよいのか、アウンサンスーチーが来たら講演させるかというくだらない反対がありました。こんなことは、個々で判断すればよいのです。

私は、経営体を経営するものは、改革のために、明らかに禁止されていないことはやってよいと思います。前例というものは、ときに便利なものですが、何でも前例にしたら何にも前進しない。

留学生が増えたため、各学部で英語の授業をつくってくださいというリクエストがきたので、法学部はつくらないという返事をしました。すると本部から、法学部に来る留学生は少ないかもしれないが、文学部や経済学部に来て日本の政治や法律のことを勉強したいという人のために英語の

授業をつくってくれないかと言われたので、仕方がないから、私や藤原帰一教授、高原明生教授などと、数人で授業をしました。アメリカでは英語の授業をして日本語の授業はしていないのに、なぜ、日本で英語の授業をするのかとか、英語以外のフランス語、ドイツ語も大事だとか、一応理屈はありますが、これは屁理屈です。

そういうわけで、現状に向かって、どうすれば長い目で見て一番利益になるか。そのために少しずつルールを変えていこうというマインドなのです。放っておいてはダメなのです。だから組織のリーダーシップは、とても重要だと思います。今、国や大学では難しい。今、割合できるのは、おそらく地方自治体であり、蒲島さんが知事になられて良かったと思います。おそらくいろいろな事が出来るのだらうと思います。

それから、もう少し、大竹さんのお話に触発されたことを言わせてください。

日本は、長命企業がたくさんあります。それから、日本の次に多いのはドイツだったと思います。ドイツでは、小さな中小企業と優良技術を持ち、本当に利益を上げているところは長いです。日本のキヤノンというコピー会社がドイツに行って合併企業をしています。ローラーを作っている会社と日本の企業が合併をつくりました。このローラーの会社は、数百年の歴史のある会社で、もともと機織り機です。起源を遡ればエジプトの画によく描いてあります。そういうのは優良中小企業で、資金、株式を公開しないでずっと経営しているという企業がドイツの都心に根ざしています。その反対は韓国で、おそらく韓国は発展志向が強いので、次へ次へと大きいのを出して、結局、小さな伝統企業が残らないことが多いと言われていています。

大竹さんの配布された資料の中で、もう一つ触発されたことを申し上げますと、日本人がその企業の中に「義を先にし、利を後にする」というのは、本当にそうだと思います。「仁義礼智信」という言葉があります。信という言葉が一番下です。しかし、日本は、信というのがとても重要です。信というのは、きちんとしたお客さんには、必ず契約どおり物を渡します。遠くの知らない人でも、知っている人でも同じように責任を果たすという、古い日本のコンセプトがあり、信用、暖簾(のれん)というものを大事にします。これが日本の強みであり、最初に大竹さんが、「アジアの」と言われましたが、私は「日本の」ではないかと思っています。

今、日の出の勢いの中国に、古代の中国の儒教の美德が残っているかということ、ほとんどもう無いのではないかと思っています。仁というのが中国にあるのかと、あったらあんな事件などは起こらないわけです。韓国もそうです。韓国も今、キリスト教徒が非常に多くて、韓国人は、やたら整形するでしょう。あれは儒教違反です。「身体髪膚これを父母に受く。あえて毀傷せざるは孝の始めなり」と言ひまして、身体を傷つけてはいけないというのが儒教の教えなのです。むしろ日本は、昔、ハンティントン先生が言っていたとおり、日本人独自の文明だと思います。私が今関係している非常に重要な部分は、中国韓国との関係をほぐしていくことです。安全保障の問題をどうするかということが、未来の大きな関心ですが、もし時間がありご関心の方がいれば、またお話します。

#### 【蒲島議長】

ありがとうございます。今、東大法学部のお話が出ましたが、ちょうど同じ頃、北岡さんと私は、

法学部の教授になりました。前例主義というお話がありましたが、私が最初驚いたのは、東大法学部では研究室に学生を入れてはいけないということでした。長い伝統があったようですが、私はそれを全然知らなかったの、私の部屋には学生が沢山来ました。そして、学生にいつも研究室のコンピュータを使わせ、いろいろな計算をさせて本を書いたのですが、そういうことは、おそらく私が行かないとできなかったことだと思っています。その時のゼミ生が、今二人熊本県庁に来ています。総務部政策審議監の木村君と副知事の小野君ですが、そういう前例を破壊する私を見て、今までの行政の管理、指導、規制型の熊本県庁から脱却して、県民の幸福量最大化を目的とするような県庁になろうと言っています。そういう意味では、違った思想、違った考え方をを持った人が組織に入り、一種の破壊が創造に結び付くということも言えると思います。

そういうことは、大竹委員が一番ご存じだと思います。

#### 【大竹委員】

北岡先生と、蒲島知事がおっしゃっていただいたとおりで、私も個人的には、日本人の今置かれた立場で、日本の戦略をどこに置けばよいかと考えます。私は国立大学4校、私立大学6校、国連大学協力会など、いろいろな大学に関係させていただいておりますので、学生や教授の皆さんと接する機会が多いのです。先ほど軸と申し上げましたが、自虐史的、ステレオタイプと言えば失礼かもしれませんが、そういう情報に彼らが一喜一憂されているというのが、とても気になってなりません。第三者的評価に終始するのではなくて、当事者として、冷静にこの課題を分析していただいて、戦略の構築、そしてどうすれば具現化できるかといったことを、私はいつも強調させていただいているわけです。

国連大使をされた北岡先生ですから、地球規模の話をされております。私は、心に地球儀を持つということ、昨日も講演会で申し上げたのですが、今までは例えば日米や日韓など二国間という感じでしたが、決してそうではないわけです。地球規模の課題といえば、環境問題も出てきます。エネルギーの問題も出ますし、食料、健康、難病、情操教育、貧困、金融などの解決を先頭に立ってやるのが日本で、日本の戦略の中に、それを置かなければ、尊敬される国家には成りえないと思います。また、それを日本国で本当にやろうと思えば、できる課題だと考えています。

また、7月31日に広島県の湯崎知事に依頼され、世界経済人会議に出席しました。私は、パネリストとして、知事と一緒に「国際平和に向けた世界経済の果たすべき役割 ビジネスを通じた平和構築」のセッションに出たのですが、アジア、アフリカなどこれから成長を遂げる国々の持続可能な成長をサポートしていくためには、教育や食料、社会、インフラについては援助から投資が必要であると議論させていただきました。

それから、日本は、成熟した国だと言われています。成熟国の課題解決をサポートしなくてはなりません。前東京大学総長で現在三菱総研理事長の小宮山先生が「課題先進国」という言葉で表現され、本も出されていますが、アジア、アフリカは、精神疾患や、高齢者の医療介護など必ず日本の後をたどります。癌、脳、心臓、認知症、精神障害、低コスト商品、そういうものを日本国がつくれる国、体験した国なのです。

私は、東京都社会福祉協議会の会長の職を4年間仰せつかり、都市型の独居老人の孤独死というものを見てきました。私たちはこのような問題からも多くのことを学んでおり、我々の国がこれから諸外国にサポートできるのではないかと考えています。

また、東日本大震災となった3.11もありましたが、有史以来3000年、1312年(大宝律令制定から)という歴史の中で、この国は幾たびも徳政令を出しています。徳政令でなくてもそれに近いものを、この1312年の間に何回経験したか。もっと申せば、国民は飢餓状態にもなりました。応仁の乱から見てもそう思うのですが、いろいろなことを乗り越えてきた国なのです。そういった力を持っているのは、この日本国民だと感じておりますので、そのノウハウや日本に学んだ人材というものが、世界中の危機対応、破たん処理に貢献できると思います。

私は広島で生まれ、6歳のときに原爆の被害にあいました。現在、広島大学の仕事も手伝っているのですが、そこで国際紛争を処理するための研究機関をつくらうではないかと動いています。国連の力も必要ですが、予防できるならば、そこで全世界の英知を集めたらよいではないかということ、ずっと言い続けているわけです。

未来というテーマで申し上げれば、いくらでも日本人の果たすべき役割はあるような気がしてなりません。大きな項目ばかりあげましたが、今、これをもっと具体的に、一つ一つ地についた活動に持っていくことが必要だと思います。では、何から始めるべきか。これは、プロセスを大事にしなければならぬと思うわけです。

#### 【蒲島議長】

北岡委員、お願いします。

#### 【北岡委員】

つい昨日も、国際大学の1年コースの終了式でした。そこで、いつも言うのですが、若い時に海外に留学するというのは、人生で一番大きな決断の一つだろうとみんなに祝辞を述べました。

違う文化であるというのはすごいことです。私も、今 GRIPS というところで教えていますが、教えていて随分勉強になります。私は日本の外交について教えています。GRIPS というのは、政策研究大学院大学(NATIONAL GRADUATE INSTITUTE FOR POLICY STUDIES)のことですが、英語の授業をしていて、クラスは数人です。私のクラスはなぜか24人いて、日本人が3人で、あとは21人外国人なのです。やはり多国籍が良いです。私は全部アメリカ人というクラスを教えたことがあるし、日本人に少数外国人がいるというクラスももちろんありました。しかし多国籍の学生だと、例えば、戦後の日本の賠償問題という話になります。植民地統治で、日本は戦後、東南アジアに賠償金を払っているのです。中国は放棄したので払っていません。韓国は戦争していないから、賠償は払っていませんが準賠償という経済協力をしています。それは少ないと文句を言っているわけですが、中国でも異論はあります。では、インドネシアは、オランダから賠償金をもらっているでしょうか。もらっていません。それでオランダは、どう責任を果たしたかという、大した責任は果たしていません。では、インドネシアは全然無傷かという、東ティモールで今度はやや侵略の抑圧側

にまわったこともあります。

そのように見ていると、まあ人生や国際関係というのはいろいろだということは分かってきます。これが、仮に日朝だとか日韓だけだと、向こうが一方的に被害者だったということで、我々が責め立てられる。そうではなくて、そこにオランダ人やスイス人がいたりします。ハンガリーがまた面白い。ハンガリーは、枢軸側ですから、加害者でもあり、無理やりされた被害者でもあります。ポーランドの女の子がいて、ドイツの学生がいます。ドイツはポーランドと共同の歴史教科書を作っていて、うまく行っていると言われますが、ポーランドの学生に言わせれば、全然うまくいってはいないということです。そのようにどの国にも良いことも悪いこともあり、それぞれのやり方で努力しているということはよく分かってきます。100%正義の戦争も100%悪い戦争もないように、100%良い国も、100%悪い国もありません。

では、世界で最も悪い植民地統治をした国はどこだというと、国連なんかで議論すると割合常識的なことが出てきます。ベルギーのコンゴです。あれは、最悪の統治なのです。それからポルトガルです。ポルトガルのアンゴラなど、ポルトガルが残した傷跡が沢山残っています。もっとひどいことをしたのはスペインで、あれは、植民地支配どころか中南米のインカやアズテカ文明を丸ごと抹殺しているわけです。最悪です。イギリス、フランスだってひどいものです。スーダンというのはイギリスが無理やり一つにした国が、無理を生じて今まだ紛争しています。中東もそうですし、フランスもいろいろ大きな問題を残しています。日本は、ましな方です。我々から、ましだとは言いにくいのですが、この間の韓国のバン・ギムンの発言には、日本は断固抗議するべきだと思います。ただ、グローバルの中に投げてみて、グローバルヒストリーの中で日本の過去の良いこと悪いことについて考えてみることです。そうしてみると、インドネシアとオランダの関係はとても勉強になりました。

実は、今、日本はアメリカ一辺倒だと言われていています。しかし、1950年代の後半は、アメリカは、当時のスカルノ政権を倒そうとCIAを使っていろんな工作をしているのです。これには、日本は協力を拒んでいます。オランダは、領土の残った部分をおさえようとし、その前には、もう一度インドネシアを植民地にしようとして、いろいろな攻勢をかけてきたことに日本は協力を拒んだのです。オランダの海兵隊が東京に寄りたいたいという申し出を拒否しています。結構、独立支援の方向でやっている方です。

それから、岸信介さんの安保改定も、アメリカが結構最初嫌がったのも原因が沢山あるわけです。佐藤さんの沖縄返還もいろいろ密約が残っていますが、最初は沖縄が帰ってくるとはとても考えられなかったことだったのです。だから、高度成長期には、まだガッツがありました。それ以後、現状維持的になっているのではないかという気がします。

最初に申し上げた少子化の人口問題も深刻になってくるのは、20何年前から分かっているのに、何の手も打っていないのです。

学力がどんどん低下していることも、子どもの体格、身長体重は伸びているが体力は落ちていることも、もう何十年も前から分かっているのに、どんな手も打っていないのです。体育の授業を増やすことが最も有効な方法ですが、やっていないのです。まだ大丈夫だとずっと先延ばしてきて、

ここまで来ているというところですよ。過去にいろいろ大きな変化をしたことをもう一度思い出して、いろいろな手を打ちたいと思っています。

日本のモデルが普遍的に通用するというので、もう一つお話したい。

国連では、最貧困地帯の人を減らすために MDG、Millennium Development Goals というのをつくって、例えば乳幼児の死亡率を減らすとか、女の子が学校へ行くのが難しい女の子の進学率を上げるとか、いろいろなことを設定してやっています。これをなんとか実現するためにコロンビア大学のジェフリーサックスという人が、Millennium Villages Project というプロジェクトをやっているのです。これは、アフリカの最も貧しい村を選び出して、そこに直接お金を入れて、UNDP という国連の機関が実施母体となって、そこを豊かにするというものです。ポイントは、公衆衛生と初等教育、農業改革です。

まず、公衆衛生の有名なものと言えば蚊帳なのです。マラリアで、今でも毎年100万の人がなくなっています。その原因となるハマダラカという蚊は、夜11時から朝5時まで活動します。ですから、その間蚊帳に入っていたら大丈夫です。今、この蚊に特別効く、蚊を殺す効果を持った薬品を塗り込めた蚊帳を世界で作っていて、その最も良い品質のものを作っているのは住友化学なのです。日本は昔蚊帳があったし、蚊取り線香は虫除けに沢山使っていました。徐々に、原料がもっと安いものを使い、ケニアにあるもので作るようになって、できてきたのがオリセットという蚊帳です。それが、非常に効果があるということが分かり、私がちょうど大使だった頃に、これを増産してほしいといういろいろ斡旋し、増産して、住友化学が世界的に非常に名声を博しました。

それから、井戸と学校です。へき地なので先生が来てくれません。まず、先生の家を造って、校舎を造って、学校を造ります。保健所を造って、お医者さんと呼んできます。

それから、農業改良です。農民は非常に伝統的なので、農業の品種改良は難しい。これを指導するのはモデルがあり、実は日本なのです。明治期の日本の政策に、サックスはいろいろ影響を受けてこのプロジェクトを始めています。私もこれに触発され、私がやっている小さな事業もその関係です。

ですから、日本のモデルは、ここまで伝わる可能性が随分あります。歴史をよく思い出して、日本のやってきたことを世界史の中で比較をしながら考えていきます。そこから力を得て、また未来へ向けてやっていこうということが大事なことだと思っています。

【蒲島議長】

では、大竹委員、お願いします。

【大竹委員】

今、先生がおっしゃっていただいたことは、本当にそうです。私が、最初に申し上げたのは理想的過ぎる部分があったかと思いますが、そこに行きつくまでのプロセスにおける改善と組み合わせというのは、辛抱強く耐え抜くという努力が、今、求められているような気がしてなりません。

それから、つい最近聞いた話をさせていただきます。1990年代にソ連邦が崩壊しました。東西

統一統合の時代、ドイツでは、大学で国家学という学部を創設した大学があるということを知り、目下調べている最中です。同じ敗戦国でありながら、ドイツでそんな学部ができて、どういう教育をなさっているのか非常に興味がありますので、調査・研究してみたいと思っています。

歴史と未来の話をしました。近代というのも、先生がおっしゃるように分岐点、大きな転換期に差し掛かっているということも、一方においては直視しなくてはならない事柄ではないかと思うときに、近代化から卒業しなくてはならないということでもあるのです。変えどきというのはいつの時代にもあるわけですが、何か姿を消し、何か新しいものが生まれています。産みの苦しみというのも当然あるわけで、それを経て生まれてくるわけですが、何か引き裂かれ衰退し消滅する一方で、今だに正体不明の何か別のものが、荒削りですが世の中から生まれてきているのではないかと思います。

特に、私は50年間アメリカの企業にいますと、アメリカは世界で異質な国かもしれませんが、先ほど申しましたとおり、信じられないようなものが生まれてくるのです。

今後もおそらく、そういったものが繰り返し出てくるように思います。企業で申し上げれば、最初に大きく分けて誕生期というのがあり、私も会社を創った人間ですが、新しいものが生まれてきます。それから少年期に差し掛かり、青年期、成熟期を迎えて、衰退期を迎えるという繰り返しなのです。企業の一生というのはそのようなものですが、人の一生にも例えてお話ししたわけです。国も県も、同じではないかという気がします。栄枯盛衰というのは世の常ですから、それは受け入れざるを得ませんが、成熟期を迎える前に、次なるものの準備をします。私は、40年間自分で会社を運営してみて分かったことですが、やはり絶えず健康診断しながら、次なるものを準備し、寿命を長らえさせることは可能だと思います。

そのためにも、歴史から学んで、新しい未来を創造する、この繰り返しが企業にとっても我々にとっても、一つの哲学になっているわけです。

それから、先ほど、北岡先生もおっしゃいましたが、私は、グローバルビジネス学会というのを立ち上げて、今、会長を承っており、今年、第一回の学会を早稲田大学井深ホールで開催しました。来年の3月は京都大学で開催しますが、「おもてなし」というとても面白いテーマです。皆さんが議論して決めたものです。これを中心に、皆さん方の意見をいろいろと聞いて、つくりあげてみたいと思っています。

#### 【蒲島議長】

皆さんの話を聞いて、地球の話を少しお話ししたいと思います。

地球が、何度も滅亡の危機に陥ったことがあります。大変化が起きた時に生き残るのは、その時代の一番弱い、隠れて生きているような動植物なのです。一番良い例が、恐竜です。一番栄えたのですが最初に滅亡するのは恐竜で、変化に弱い。それが、同じように企業や政府、社会にも当てはまるのかと思います。変化に強いと思うのはハーバード大学ですが、随分長い間、世界のナンバーワンを保っています。私もハーバード大学で勉強したことがあります。あの大学のすごいところは、非常に多様性を尊重することです。頭の良い人だけをとらず、とにかく多様な人をとる

ということ、それから変わった人をとります。そういう意味で、私がなぜハーバードに行けたかという、日本的には非常に変わった学生ですから。子どもが二人いても奨学金をくれるぐらいです。こういう大変化の中においては、組織も企業も社会も、あるいは県庁においても、そういう視点も必要かと思います。

#### 【大竹委員】

全くそうですね。

#### 【北岡委員】

せっかく熊本県の話なので、私は、以前蒲島さんに頼まれて、清浦奎吾150周年記念講演をしてほしいと言われ、鹿本に行ったことがあります。前の知事さんに、ついでに田原坂などを見せてもらいました。

清浦奎吾というのは、大正13年に総理大臣になって半年で辞めており、日本近代史の中でそんなに有名な政治家ではありません。有力者で官僚政治家として知られているだけの人です。しかし、蒲島さんに感謝しているのは、そのとき清浦奎吾のことを一応調べ、なかなか立派な人ではないかと思ったことです。

彼は、明治の初期のボアソナードというお雇い外国人の弟子です。いろいろな法律制度を輸入することに成功した人です。法律制度というのは、そう簡単に輸入できるものではなくて、日本に合ったものにしなければなりません。ですから、彼は、明治10年前後に活動を開始し、最後は第二次大戦の太平洋戦争直前まで重臣として生き延び、90いくつのときに車いすで宮中に行っています。これはなぜかといういろいろ調べたのですが、清浦は日田の咸宜園で勉強しているのです。それで興味を持ち、咸宜園へ行ってみました。広瀬淡窓という人がやっていた、江戸時代後期の最大の塾です。なぜ、熊本でも博多でもなく、日田にそういうものがあるのだろうと興味を持って行ったのですが、感心したのは、日田の咸宜園は「三奪の法」と言いまして、身分、出身、年齢などによる差別がありません。つまり、あそこは天領のものですから、あらゆる身分の人が入れます。お年寄りや女性の生徒もいたということで珍しいところですよ。

日本の江戸時代が生み出したものは、いろいろあります。なかには江戸時代を非常に理想化し、また江戸時代のようになりたいと言う人がいますが、このグローバル化の時代にそのようなことはあり得ません。

しかし、江戸時代にできた良いもの悪いもののうち、良いものの一つは、意図せざる結果なのですが、やはり城下町なのです。武士という軍事力を持った人間を町に住ませたわけですよ。これは消費階級なのです。だから、生産と消費を分離したのです。武士は何も生産しませんから、孤立した町に住んで、そこで彼らを支える農業や商業や工業が発展したのです。熊本のような大きな藩から小さな藩まで相互に競争することで経営能力が磨かれ、競争の中で発展し、そこに藩校ができ、いろいろ勉強していろいろな人が出ます。これが典型で、先ほどの咸宜園は、例外的で全く自由な学校です。自由な学校の例で最も有名なのは大阪の緒方洪庵先生の適々齋塾。これは

蘭学の塾ですが、福沢諭吉、大村益次郎はじめ、蒼々たる人が出ています。これも全く身分は関係ありませんが、ただ、事実上は医者の子が多かった。

やや誇張して言いますと、何を教えているかというよりも、日本の優秀な人が集まって切磋琢磨していること事態が重要なのです。そこで素行も磨かれますから、心身ともに教養を受けて成長します。

この間、高知県の外れの宿毛という所に行きましたが、随分田舎です。それから、最近一番暑かった、四万十市の辺りの中村という所に行きました。宿毛は吉田茂の父親が、中村は幸徳秋水が出た所です。幸徳秋水と言うと過激派というイメージがありますが、立派な思想家です。

土佐は大きな藩で、そこに支藩のようなものがあり、そこで学問ができるのです。やはり江戸時代の一番の遺産は学校なのです。教えていた中身は、朱子学やその変形が多いのですが、学校で切磋琢磨するというのは、立派なことだと思います。

ただ、後に日本は技術教育中心の制度になってきて、それで良いのかと思います。人格教育もやっていて、相互に共生し、もちろん中身が良い的確なものならもっと良いですが、そうでないところでも、いろいろな人が世の中に出てきています。

昔の城下町に代わるものは、今は、大学です。大学で人を知る、教える、破壊的創造をするような、前例を超えていくような教育をします。直接教えられるのは、我々周辺の2、30人の学生ですが、学生は先生がきちんと研究しているところを見ていますので、きちんと教えます。結局、教育というのは背中でやっているようなものです。管理するのは大変ですが、そういうところをいかに満たして、それをまた外国の強い文化にさらして、更に伸ばしてもらいます。

私は、教師として、やはり学生は、せつかく持っている能力を一生ずっと生かして欲しいという思いです。おそらくそれは、知事も同じだろうと思います。県民の方もみんな持っている能力を生かして幸せになってほしいということで、学校のことをいろいろ申し上げたのです。

近代は主権国家であり、国にはがっちりとした概念でできてほしいものです。しかし、この時代はそんなに長くないのです。国だけが国際社会の単位というのは、1600年か、それ以後のことです。昔は、国以外にいろいろな単位が主権を持っていたのです。

例えば、モーツァルトはどここの国の人ですかという小さなクイズで、一応正解はオーストリアですが、より正確には、ザルツブルク大司教領です。ザルツブルグの大司教領というのは、一種の特権を持った領地です。大学も同じで、ハイデルベルグ大学というのは、一種の特権を持った領地です。昔は、日本でも博多や堺は独立していました。そういうわけで、おそらく国家が全てをカバーした時代が終わりつつあります。次は、自治体や都市、また都市と都市が共に手を結ぶことが重要です。

例えば、日本と韓国の間は難しいが、熊本とソウル、あるいはプサンとは仲良くできる、大学と大学が仲良くするなど、そういう時代もあると思います。国と国が、がちがちに固まって動きがとれないのを、ほぐしていくような役割も自治体がやらなくてはならないのではないかと思います。だから、熊本県がそういう動きをしているというような話をたまに聞くと、とてもうれしくなるのです。

#### 【蒲島議長】

大竹委員のキャリアパスは想像を絶するもので、その中でさまざまな困難や変化に対応してこられたのですが、そこから得られた未来への対応、センスのようなものがありましたら、少し教えていただきたいと思います。

#### 【大竹委員】

私は、今、知事がおっしゃっていただいたように、皆さんの前で申し述べられるような生まれ育ちではございませんし、大学は出ていません。ただ、辺ぴな所で生まれて、競争しても勝てないということを高校生の頃に悟ったのです。そこから、私は、けもの道ばかり歩いて今日に至っています。ということは、人さまが、おそらく避けて通る道、あるいは危険だからこんな冒険を冒したくないという分野ばかりを探し求めてきたのが私の人生です。

現在は、先ほどご紹介しましたように、グローバルビジネス学会を立ち上げようということになり、グローバル教育ということに対して非常に興味を持ち始め、今、北岡先生がおっしゃっていた部分を深めさせていただいています。グローバル教育と言えば、一番最初にくるものとして、総合的な能力は非常に貴重な能力だと私は思っています。

それから、先ほど皆さま方からお話がありましたように、私は日本人であり、アメリカ企業に50年いますが、アメリカ企業にいればいるほど、愛国心が強くなってしまいます。ですから、本当に矛盾の中で戦い続けている今日ですが、オリジナリティーというのはとても重要だと思いますし、非常にスピードが求められているということを痛感しています。それから、異能・異才ということも申しあげましたが、無謀と思われても、やはり行動しなければならないと思います。

6月13日に私は冒険家の三浦雄一郎さんと対談しました。ある雑誌社から電話がかかってきて、三浦雄一郎さんとお話したいということでした。三浦雄一郎さんも私とならということでお引き受けいただけ実現できたのです。4時間ほどの対談で、私は感じていなかったのですが、三浦さんは私のことを随分研究してくださっていたようで、重なる部分が沢山あるとおっしゃって、私は自分のことをそこで改めて認識いたしました。

皆さんにこの機会にご報告しておきたいのですが、グローバルビジネス学会の会員の渥美育子さんからお聞きしたのですが、国際ルールに従っていない全世界のいろいろな企業が罰金を払っていますが、その40%が日本企業なのです。莫大な罰金を支払わされているのが日本だということを最近私は知りました。

二つ目に、非常に生産性が低いのです。要するに利益率が低い。これが、グローバル社会の中で、日本が目立ってきたということです。

最後の三番目は、グローバル教育といっても、教えられる先生がいないということです。企業でも同様です。そういう現状を踏まえて未来を展望し、半歩でも、一歩でも、二歩でも前進していくことが非常に大事です。挫折や苦しみを耐え抜いた方々が沢山いらっしゃいます。そういう方が教壇に立っていただけないかというのが、私の申し上げたい点です。産業界から、50代、60代で定年を余儀なくされている非常に有力な方々が沢山いらっしゃいますので、教育現場にもそういう人

を活用してほしい。北岡先生が大学の役割とおっしゃっていたのですが、大学の役割も大きいと思いますが、社会全体が人づくりということに対してもっと関心を持つことが、非常に大事ではないかと思えます。

文部科学省は、家庭教育までは口出しできないということをおっしゃっておられますが、これは社会の責任です。私の祖父母や両親を見ていてもすごく厳格で、私はスパルタ教育を受けたわけです。その上に、わが家におじが終戦後戻ってきて、余計私は引っぱたかれて育ったのですが、ああいう時代と今の時代では時代背景が全く違います。今の若者は、その点は不幸で気の毒です。しかし、それだけで片付けられないのです。ですから、先ほどもご紹介したとおり高校生の夏休みを利用して毎年合宿し、多くの皆さんからいろいろな講演をしていただいています。今年で9年目になりますが、これは実は高校生同士が学び合う気付きの場なのです。場を提供しているだけなのです。一方的に先生が講義するというものではありません。ですから、私たちの役目は、本当に本人たちが気付く場を一刻も早く、つくってさしあげるということなのです。

それからもう一つご紹介しますと、私は、16年間日本青年会議所の「人間力大賞」の選考委員長をしてきました。最終選考をするのですが、信じられないほど沢山の人が海外で活躍しているのです。緒方貞子さんよりも、もっと立派な仕事をしたいという方もいます。ですから、将来は決して暗いわけではありません。私が接した方だけの話ですが、日本の将来はすごい展望が開けているような気がしてなりませんので、私は悲観的になっていないのです。

#### 【蒲島議長】

会場の皆さんにも、質問の時間をつくりたいと思います。そこで、この辺で最後にご両人に一人5分程度で、これまで話してきた未来に責任を果たすために、今県が何をすべきかというアドバイスやご意見をいただいて、その後会場の質問に移りたいと思います。言い忘れたことや付け加えることがあればお願いします。

では、北岡委員からお願いします。

#### 【北岡委員】

先ほどから何度も言っていますが、日本の戦後の制度というのは、ある程度成功し過ぎたのです。特に、冷戦期は非常にうまくいきました。象徴的なのは、憲法9条と日米安保は一見矛盾しますが、この二つの組み合わせは何とかなったのです。自民党が政治をやって、野党が理想的なことを言っていますが、実際の影響はありません。うまくいったので、もう一度日本が自分で地獄を見て厳しい決定をするという機会、必要性がないまま1989年が来たように思います。

一応、常識で東大が最高学府とすれば、東大出の総理大臣は、戦後誰がいるかというと、吉田茂、鳩山一郎、岸信介、佐藤栄作、そして中曽根、宮澤です。なかなか立派なリストですが、ほぼ戦前の教育を受けています。戦後はまだ十分なリーダーを生み出していないのです。それはなぜでしょうか。それから、今言った人たちも、戦争直後の敗戦という悲惨な状況をどうしようかと日本をリードしてきた人たちです。日本がうまくいっていた中で育ったリーダーたちによって、日本の政

治は微調整の政治になってしまいました。その微調整の政治に地方自治体は慣らされてしまったのではないかと考えています。ですから小さなことと言えば、中央からの行政指導や中央からの慣例に対して、小さいことでも「No」といちはち言うことは大事です。あまり東大の教授が「こういう慣習になっている」と言うと、蒲島さんは「そんなの知らない」と言うのと同じように、中央が何か言ってきて「No」と言い、混ぜ返していくということはとても大事なのではないのでしょうか。明文で必ずと書いてあること以外は、全部でやって良いという方向で、何が我々の県の利益になるのか、県民のためになるのか、熊本県は、国連の中で言えば何十番目かの国に相当する力があります。行動していき切磋琢磨することは、私は日本を良くする方法だと思っています。

#### 【蒲島議長】

大竹委員、お願いします。

#### 【大竹委員】

私は、緒方貞子さんと時々一緒させていただく機会があり、講演も何度も聞かせていただいています。一國繁栄主義というのは、もう終わったということを何度もお聞きしています。まさしく日本が経済大国というのを卒業し、新時代の創造、イニシアチブをどうとるか、世界をどうリードするかということが、今、日本の置かれた立場ではないかということを、私は、個人的に感じています。もっと具体的に申せば、先ほども価値の話をいたしました。重視すべき価値は何でしょう。これは、優先順位というのを付けてみる必要があるのではないかと思います。

例えば、資源エネルギー、技術、人工物というものから、生命、人生、生活、ネイチャーというものに置き換える必要があります。また、富国強兵や経済成長から、健康長寿や友愛、生存に、ハードパワー、物質エネルギーは、ソフトパワー、ヒューマンパワー、情報に換えていく時を迎えていると思います。私は、ビジネスマンですから、もう少し重視すべき活動の優先順位を見てみますと、経済産業、これはやはり健康で文化的な事業と社会と人生というように考えたいと思います。

それから、大量生産、物流消費、廃棄というのは、環境、育児、医療、介護、学習、交流ということを考えていく必要があります。徴税や徴用、徴兵、国家総動員という時代がありましたが、これはつながり、交流、協働、創造、クリエイティブ、文化。それから競争や勝利というのは、コミュニティへの自立的参画、これは知事が率先していただいているその貢献。それから近代交流と、利己的隆起というのはもうパンクして、支え合い社会。私は、堀田力(ほった つとむ)さんと一緒に「さわやか福祉財団」をつくりました。Jリーグをつくった川淵チェアマンも一緒でしたが、今度首都大学の学長になられたので、面白い学長になると思います。

そういうことで、本当に支え合い社会というのは私は強く信じて疑っていません。それから物質的価値、至上主義という唯物論、これは子々孫々の生存と幸福、そして文化卓越主義、多神論というところに置きたいと思っています。私はクリスチャンで、マザーテレサが死ぬ前に言った言葉がとても重要であると感じています。「どんな宗教でもよいから一つだけ宗教を持ちなさい」と言ってお亡くなりになったのですが、まさしくそのとおりでと思っています。

野田佳彦さんが総理大臣をお辞めになったので慰労会を開いたのですが、そこでお話を伺っていると、退任直前に天皇皇后両陛下が皇居に野田ご夫妻を招かれ、長い時間お話をお聞きになられたようです。そこで、野田さんは、国を担う上で一番重要なのは道德心、二つ目には、信仰心であるということをおっしゃったそうです。やはり人間社会において大事なことは、そういったものを大切にすることだと思えます。

最後の三つ目は、国際観ということをおっしゃいました。私は、野田佳彦さんを個人的に非常に尊敬しておりますし、個人的な付き合いがあるのですが、民主党そのものはあんな形になりましたが、素晴らしい人物だと惚れこんでいただけに、この三項目の言葉を承ってさすがだと思えました。

もう一つ最後に付け加えさせていただきますと、円高がずっと進んでいる頃総理大臣になったそうですが、国家が危機にさらされていると言って伊勢神宮にお参りに行かれたのです。帰りに川に入って、国を救ってくれないか、国を救ってもらいたいと祈り続けたと言うのです。あれがやはり指導者だと思うのです。知事はそれ以上のことをしていただいています、やはりそれによって、国は変わると思うわけです。今は政権が代わりましたが、今の総理にもそのようなことを期待したいと思えます。国民も一人一人の責任において、国家というものを支えるという一人一人の役割があるということ、みんなが自覚することが一番大切なのではないのでしょうか。指導者だけに依存するとか、国に甘えるとか、自治体に甘えるというのは、どうもいかなものかと思えます。一人で考えて、一人で行動して、一人で結果を出すということが、一番大切なことだと思えます。

#### 【蒲島議長】

ありがとうございました。これまでの未来会議と違い、今日は二人だけにおいでいただいたのですが、この方式は良いと思えました。なぜかと言うと、充分話していただけます。6人や7人だと、一人5分から10分で終わらなければならないので、私ももちろん話すことはできないし、委員の方もとても時間がありません。二人お呼びして充分話していただいた後、参加者の方からも充分質問を受けることができますので、これから質問を受けたいと思えます。お名前と、どちらの方にお聞きしたいのかというのを明解にして、手を挙げていただきたいと思えます。

日本でもトップの有識者の方々に熊本に来ていただいて、皆さんに話をしていただき、質問の機会を設けてくださったのでご遠慮なくお願いします。

#### 【一般質問】

今日はありがとうございました。

三人の先生方に質問します。まず、「社会、会社が必要とする人」と「社会、会社を必要とする人」のどちらも生きていくために大事だと思えますが、「が」と「を」の違いを教えてください。もう一つは、誰しも年をとっていきますから、早く社会感覚や時代感覚などいろいろな面で考えて行動をしなくてはならないと感じます。

それから、今日は本当に来ていただいてありがとうございます。

#### 【大竹委員】

私は、会社を起こし、サラリーマンを一回もやったことがないのです。給料取りだった経験がないので、そのことはお伝えできません。

私は先ほど申しましたとおり、人生のリハーサルとでも言うべき一人で考えて一人で行動するという習慣は、高校生のころから養われました。なぜかと言うと、小学校のとき、通学には片道、1時間半、往復で3時間かかったのです。舗装もしていない泥道を、ずっと通学していました。どういふふうに生きてらよいかということ、まず考え始めたわけです。小学校三年生のときに、初めて父親に連れられて、広島市内に出かけました。ローカル線で3時間かかり、熊本でも走っている路面電車を見てびっくりしました。それから宇品という港に行って、海を初めて見たのです。その時に私の人生観は変わりました。今でも強烈にそれはあります。私は、世のため、人のために、役に立つ仕事を見つけなさいと言われて育ったのです。学業成績のことは一つも父親は言いませんでした。ただ、人生大学の優等生を目指せということは、常に言われて育ったのです。ですから、私は、死ぬまで学習しなければならないということで、一生懸命今も続けているわけです。

企業というのも、実は社会の一員なのです。企業市民という言葉もあります。特にアメリカの企業は、利益が出れば社会に還元するというのは当たり前のことなのです。そういうことを、ずっとこの50年間学んできました。ですから、私は20年前に社長を引退し、教育問題と医療問題の二つに絞って社会貢献活動を続けさせていただいています。これは、アフラックというよりも、日本国の社会の一員であるという認識のもとでやっており、そういうことを日本国で広めたいということをやっています。経団連も、ある時期いろいろと理想を掲げられましたが、景気が悪くなると一気に寄付や社会貢献活動をやめてしまいます。今、留学生が減っているというのも、景気の影響もあるそうです。これは、おかしいと私は思います。厳しければ厳しいほど、教育にもっとお金を投じて、留学生も増やして、将来の投資をしなければなりません。人に投資をするというのは、必ず返ってくるということを、私は40年経験しました。ですから、教育費は社内でいくら使っても良いと言いました。それは、社会のために役に立つから申し上げたわけです。

#### 【蒲島議長】

他に質問はありますか。

#### 【一般質問】

前例主義の破壊というような言葉が出てきました。特に、北岡先生が何度かお話になりましたが、先延ばし、あるいは、まだ大丈夫だというような言葉もございました。「制約からの脱却」辺りがかなり近い言葉だろうと感じながら聞いていたのですが、前例主義の破壊が起こる瞬間とか、あるいはその破壊を起こすエネルギーというのは、どういう形で起こってくるのかということについて、抽象的で大変申し訳ないのですが、教えていただければと思います。

## 【北岡委員】

私の一番専門は、日本の近代の政治や外交の歴史です。最大の事件は、初期には明治維新、後半は太平洋戦争です。なぜそんなことになったのか。

私が国連大使をしたときに、日本は安保理改革というのに挑戦しました。常任理事国になろうという運動をしましたが、実は技術的、ルールの非常に難しく、ほとんど不可能な挑戦なのです。国連は、当時191ありまして、128カ国の賛成が必要です。それ以外にもいくつも関門がありましたが、最初のステップが一番難しく、ある決議案を通さなくてはなりません。必要な128カ国の賛成というのは、本当に高いハードルでしたが、実はかすかなチャンスがあったのです。

まず、第一に、当時小泉内閣でしたが、小泉さんが中国政策を少し柔軟にすることです。つまり具体的に言えば、靖国に関する政策を少し柔軟にすることでした。これで中国を棄権、あるいは弱い反対にもって行く。

二番目は、当時イラクに自衛隊を派遣していました。これは、アメリカに非常に貸しがあるのです。これを武器に、ブッシュさんにひざ詰め談判して、「日本はこれを重視しており、非常に重要な政策なので賛成してほしい、賛成してくれなかったら自衛隊を引き上げる」と言って、強引な交渉をすべきだったと思うのです。ところが、小泉さんは、われわれの期待に反して、今言った二つともしなかったのです。我々は、はっきり言えば、飛車角抜きで戦ったのです。

しかし、128票必要なところの110票まで固めました。さて、そこでどうするかということで、2005年6月の前半、非常に大きな議論となったのです。このまま行けば128票はおそらくとれません。もう一つは、アメリカが反対したのです。同盟国のアメリカが反対することを押し切るのかということで、東京にためらいがあります。私は、絶対に投票に行くべきだと投票の予行練習までしたのです。誰がどこの大使を連れてくる、議場のこの辺は誰を配置して議場をきちんと見ているというように練習しました。もしかしたらとれるかもしれませんが、こういうのは勢いがついたら、上跳ねすることがあります。

そこまで行かなくとも、110はとれると、おそらく110票対30票対棄権が50票くらいあるのです。記録の上では否決だが、110対30対50だったと、多数は我々の案を支持しているという結果が残せるのではないかと。そうしたら来年またやれば良いのです。この数の上に、もう一回挑戦する。あるいは、決議案を少し緩めて賛成しやすいようにしてみる。実は、かつて、中国が国連に入ったときは、こういうやり方なのです。アルバニアが出した決議案を、何度も何度もかけて、ついに過半数とったのです。

ところが、それを東京に提案したら、勝てない勝負はすべきでない、しかし、中立のアフリカを説得すればとれるかもしれないと言って、そちらに行ったのです。私は、反対だったのですが、その時に、東京は先延ばしして、易きに付いたのです。希望的願望に wishful thinking 逃げたのです。これは実は、太平洋戦争と同じなのです。何とかまとまるかもしれないと先送りした結果、大戦争になって完敗しているわけです。その時に、あらゆる可能性を全部吟味して、絶対何が何でもこうすべきだと、必死で東京を説得しなかったことは私の責任であり、後悔しています。これをやらなかったら大使を辞めると言って、私が帰って小泉さんに直接説得すればよかったかもしれない

のですが、やはり自信が無かったです。最後のところは、本当に責任を持っている人がひざ詰め徹底した議論をするべきだったという、私の経験をお話しました。

#### 【大竹委員】

では、議長よろしいですか。私は知事と教育再生実行会議で一緒にさせていただいているので、次のチャンスがあったら、教育再生実行会議で発言させていただきたいと思います。今のご質問の点は、やはり学校教育にあるのではないかと個人的に思っているのです。なぜかと申しますと、私が(4年生の)大学を出ておらず劣等感を持っているから言うわけではありませんが、私が高校二年生のときに偏差値教育が入り、私は校長室に怒鳴りこんで怒ったことがあるのです。受験技術のように、塾で学んだ方々が1点差でより分けられて、先ほどのハーバードのような話とは全く違った、画一均一という形でやっていきますと、難しい問題は後回しにしないと、ペーパーテストで受からないのです。ですから、難しい課題を後回しすることが、リスクを下げるということで一般的に日本の社会の中で根強く定着してしまったのではないのでしょうか。

もう一つは、一度失敗したら、もう立ち直れないという日本型社会にも起因すると思うのです。失敗から学ぶということを、要は欧米諸国はやっているわけです。この前も教育再生実行会議で申し上げましたが、数学の点数が0でも、解き方がすごかったということでアメリカの大学は合格させているわけです。その方は後にフィールズ賞(数学のノーベル賞といわれ、4年に一度開催される国際数学会議(ICM)において、顕著な業績を上げた40歳以下の若手の数学者(4名まで)に授与される。)という大変大きな賞をいただくわけですが、新聞記者が大学を訪ねて行って、入試の点数は0点であったことにびっくりしたわけです。そういう社会を、一刻も早く、つくっていただくことが大切です。前例主義を崩壊するエネルギーと先ほどおっしゃったのですが、リスクへの挑戦ができるような、それだけの力を養うような教育をしていくことが必要です。前例主義などを一気に覆して、新しいものをつくる。今のような時代は特に前例などというのは全く邪魔になってどうしようもありません。これまで学んだ知識などは陳腐化してしまっていると思うのです。絶えず学び続けるということが大事だということと、もう一つは、今までの学問というのが通用しなくなる時期に差し掛かっているように思います。ですから、知力よりも、先ほども申しましたように心力の部分を、もっと重要視するような社会をつくっていくことが、この国を蘇らせる要因になってくるように思います。

先生がおっしゃいましたように、あまりにもこの10年間、20年間、やるべきことを怠ってきたそのつけが今回ってきているわけで、これを一刻も早く国民全員が分かるべきです。そしてみんなで協力し合うべきです。消費税も、今問題になっていますが、そういうものを先延ばしにするということは、あってはならないことだと個人的には思います。世界との約束でもありますし、全世界が見ているわけです。一刻も早く導入しなければ、国債が大暴落し金融機関などが破綻します。日本の経済は、全く前途多難ということになるわけです。こういうときに、我慢して乗り越えるという強靱な精神力というものを国民が共有しないといけないと思うのです。

【蒲島議長】

それでは、あと一問だけ質問を受けたいと思います。

【一般質問】

北岡先生に日韓関係の問題を、もう少しお話いただければと思います。今、非常に深刻な状況ですが、何か打開策があるのかどうか、その辺りをよろしく願います。

【北岡委員】

これは、非常に難しい問題です。私は、やはり日本は今まで、事なかれ主義でやりすぎたのではないかと思います。今回のバン・ギムンさんの発言でも、どういうターゲットが分かりませんが、私だったらバン・ギムンさんに対して、質問書を出します。「日本の歴史認識に問題があるという指摘ですが、具体的に何が問題なのか根拠を示してほしい。そして、あなたは日韓の歴史が当該者で認識の違いがあると言われていました。韓国側に歴史認識がないということですが、我々は韓国側に問題があると思っています。それを日本側だけ指摘するのはおかしいではないですか。韓国側に問題はないと思っているのですか。思っているのなら、なぜそれを言わないのですか。それから、戦争や植民地主義についての反省は、植民地をやっている国は特にいろいろあるわけで、なぜ日本にだけ言及して他の国に言及しないのですか。それは一方的ではないですか。そういうことは、国連の事務総長としてルール違反でないですか」ということを、質問書の形で出すべきだと思います。なぜなら、彼は、「それは私の真意ではない」と言っています。真意がどこにあるかわからうが、した発言は発言なのです。その発言をどう考えるか、真意と違う発言は取り消すべきであるし、あるいは補足すべきだと思います。事をこちらから荒立てることはしませんが、あまり極端なことを言ってきたら反論すべきではないでしょうか。

ですから私は、竹島問題も、国際司法裁判所に提起すべきだと前から思っているのです。提起したらきっと大騒ぎします。向こうは応じないのでできませんが、我々には理由があるのだということを使うべきではないでしょうか。だから今の例で言うと、バン・ギムンさんに、「韓国の歴史認識にどういう問題があるのですか」と聞いたら、「竹島は韓国領だと言っていることに対し、これは全く間違いであり日本領である」ということを言ってやればよいのです。

私は、日中歴史共同研究の日本側座長やってきました。韓国、日韓の歴史研究の委員もやってきました。私は幹事役で、私の先生の三谷先生を座長にして歴史研究をやっていたのですが、歴史は所詮過去のことです。我々は、未来に沢山課題があるので、過去にとらわれているのは健全ではないし、歴史認識というのは完全に一致することはあり得ません。会津と薩長だってあり得ないし、アメリカも南部と北部は違います。ハーバードは北部の大学で、南北戦争のころは大体北部の学生が中心でしたが、一部南部の学生もいて、南軍で戦死した学生もいました。彼らの扱いは最近まで別だったのです。だからそれは仕方ありません。ただ、自分たちがどういう認識を持っているか、お互いに知ることが重要です。

日本の歴史教育では不十分です。しかし韓国は、もっとひどいです。ですから、お互いの意見を

近づけるよりも、まず、相手がどう思っているのかということを知り合う。竹島問題について、韓国はこう思っている、日本はこう思っているというのを併記した小さな副読本を作って、子どもに読ませるようにするというのは、日中も含めて私のやるべきことだと思っています。日中歴史共同研究では、まず、お互いが重要な諸事件をどう考えるかという、パラレル・ヒストリーというものを目指しました。ところが、途中から、彼らは日本に誘導されていると感じ始め、ルールを守らなくなって困りましたが、それでもとにかく、不十分ながら、パラレル・ヒストリーらしきものを書き上げました。今、尖閣問題でもめています、それでも歴史そのもので、南京事件などは、中国からはあまり出てきていないでしょう。あれは我々が2006年から共同でやったからでもあるのです。ただ中国はこれを外に出さないで隠しています。共同研究の成果というものを表に出してないのです。だから歴史共同研究を堂々とやればよいのです。お互いにどう思っているか出して、できれば世界の他のアメリカやイギリスやインドのいろんな国の学者を入れて、どちらが悪いか、どう責任をとれというよりも、事実はどうであったかということをやすべきです。

例えば、そのときにやった例を一つあげれば、南京虐殺が確かにあったのです。日本でなかったと言う人がいるから困るのですが、もちろん中国人が言っているような数ではありません。30万人なんてことはあり得ません。しかし、あったことは認めます。でも、どうして起こったか、よく考えましょうということになると、対話が始まるのです。向こうもそこまでは追及しないのです。どうやって起こったのかと対話が始まれば、それは、日本に責任が主としてありますが、全部日本の責任ではありませんと私は言うのです。

例えば、あのとき蒋介石は南京を守ると、なぜ守るかと言うと、世界に対して中国は英雄的な抵抗をしていると見せるために「守る」という決定をしたのです。そして、彼の部下の唐生智に防衛を命じて逃げたのです。だから唐生智も日本軍が突入する直前に逃げていなくなったのです。日本は、残った鳥合の兵、鳥合の衆に、ここを落とせば戦争が終わるというので突入して、いろいろな悲劇が起こっているのです。だからこれは、中国にも責任があるのではないかとことを我々は書いているのです。このように客観的に議論すれば、100%悪い、100対0ということはないですが、9対1とか、8対2とか、そうやって中国も謝罪とかではなく過去のことを、きちんと認識してほしい。日本人の子どもに教えてほしいと言っているのです。我々は、それは正当だと思います。そのかわり、そちらをあまり誇張することはやめてほしい。そこでもう一度原点に戻って事実認識をやり直すということが、今必要だと思っています。

ただ、やっていた三年間を思い出すと、本当に大変で、私も二度とやりたくありません。誰か代わりにやってくれればいいと思っています。

#### 【蒲島議長】

ありがとうございました。

長時間にわたって、「未来への責任」というテーマで大竹委員と北岡委員に議論をしていただきました。その中で、いくつかのことが分かったのではないかと思います。

一つは、未来の責任といっても、変化のスキルは非常に早いのです。大竹委員の議論によると、

20年後には60%ほどの企業・サービスがビジネス界からなくなるだろうということです。その割には、まだ日本の社会は、前例主義、リスクをとらない、内向き志向、先延ばしの文化、そういうものが蔓延しているのではないかというのが、今日のお話で分かりました。

ではそういう中で、熊本県はどうするべきか、日本はどうするべきかということが大事だと思います。

一つは、大竹委員から学んだ金興植(キム・ウンシュク)氏の「皿を割れ」と、リスクを恐れず取るということなのです。

それから、北岡委員が、国から言われたことをそのまま受け入れないで、ダメなものはダメと言うことを言われました。それは、知事として非常に冒険的なことではありますが、やはり今からやらなくてはならないと思います。これまでも大分やってきましたが、もっとやらなくてはならないと感じました。

そして何よりも、教育の重要性です。

そして、今日の未来会議、あるいはこれまで12回の未来会議を開催しましたが、人とのつながりがとても大事です。北岡委員と大竹委員は、熊本との関係、あるいは私との関係という形で討論に参加して下さったのですが、未来の責任ということと、未来に対応するためには、今のうちに国内外に人のネットワークを持つことがとても大事だと感じた次第です。

今日は、最後まで参加して下さりありがとうございました。それから、多くの質問をいただき、誠にありがとうございます。本日は県政にとっても、私にとっても大変有意義な時間でした。本当にありがとうございました。

(拍手)

#### 【事務局】

委員の皆さま大変長時間にわたりありがとうございました。議事録は後日、県のホームページに掲載させていただきます。それでは先に、委員の先生方からご退席をさせていただきますので、傍聴席の皆さま、いましばらくお待ちください。